



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本戦間期における文学と科学的言説との交渉：探偵小説・指紋・写真〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	井上, 貴翔
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11627号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58731
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Kisho_Inoue_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 井 上 貴 翔

学位論文題目

日本戦間期における文学と科学的言説との交渉
——探偵小説・指紋・写真

本論文は、大正期から昭和初期にかけての、戦間期と呼ばれもする時期の日本において、文学と同時代における科学的言説、なかでも探偵小説と主に指紋という科学技術をめぐる言説とが、どのような交渉関係にあったかを考察するものである。

日本において指紋による個人識別技術が導入、整備されていくこの時期には、科学的装いをまとった奇妙な言説が数多く産出されていた。それらを現在時から「真実」ではないもの、「疑似科学」的な言説として外在的に切り捨てるのではなく、「真実」性を担保していたものを〈信仰〉と呼び、その内実を問うものである。そのような当時の科学的言説に内在する問題系を、甲賀三郎、小酒井不木、谷崎潤一郎、佐藤春夫、川端康成らの小説によって生み出される〈想像力〉から明らかにする。そして、それは作者という主体の想像力によって生み出されていながらも、作者自身が決して意図してはいなかった同時代言説の想像力との結び目であり、さらに、そうした結び目をも生み出してしまふ想像力のことであると述べる。

この時期は、〈指紋識別法〉などの整備が進められた時期であるとともに、「何でもぶちこんでしまはれる」（芥川龍之介）という小説形式が前景化してきた時期でもあり、そのことによって、小説と科学的言説の交錯に潜む諸問題が、〈想像力〉という形でより明確に浮上していると考えからである。

本論文は、上述の研究目的と方法に従い、Ⅲ部構成によって展開する。

第Ⅰ部では、具体的な作品分析を行うための準備として、明治末期から昭和初期にかけての指紋に関する言説編制を分析する。第Ⅱ部では、第Ⅰ部での議論を踏まえたうえで、同時期の指紋が登場する小説を論じる。小説内への指紋という要素の導入とは、そのまま指紋についての言説編制の一部となり、またそれに規定されていくということでもあるが、そうした言説が作品構造やあるいは同時代の諸言説と縫り合わされることで、どのような〈想像力〉の結び目を生み出しているかが、議論の俎上に乗せられている。第Ⅲ部では、〈オプトグラム〉と呼ばれる、死ぬ瞬間に見た光景が網膜に保存されていて、それを死後にアウトプットできるという〈想像力〉について取り上げる。ここでも、そうした〈想像力〉が、同時代の犯罪捜査に関わる指紋および写真の間、あるいはそれらを結びつけたところに生み出されたものであることを論証しつつ、そこにどのような論点が潜んでいるのかを考察する。

以下、章ごとに論旨を要約する。

序章において、本論文の研究対象及び、目的と方法を述べたうえで、全体の論文の構成を示す。

第一章「指紋への〈信仰〉の成立——〈指紋識別法〉のシステム化」において、戦間期を中心とした、日本における指紋の言説分析を行う。具体的にはまず、一九〇八年、公的に導入された〈指紋識別法〉が社会や人々に広まっていく過程を、フィクション／ノンフィクションを問わず、新聞や雑誌、書籍といった言説から分析する。それは指紋への〈信仰〉が次第に準備されていく過程の考察でもある。

第二章「反転する〈信仰〉——指紋への〈信仰〉の帰着点」において、第一章を踏まえつつ、指紋言説のさらなる拡がりを追う。〈指紋識別法〉の定着とわずかに遅れて並行するように、その対象範囲が犯罪者にとどまることなく加速度的に拡げられていく過程を、やはり新聞や雑誌といった言説の収集、分析によって明らかにする。そのことにより、指紋への〈信仰〉がいかに成立していったのか、そして〈信仰〉がどのような地点に帰着していったのかが論じられる。それは、指紋が適用される対象範囲が、犯罪者から精神病患者、あるいは特定の思想の持ち主、さらには「国民」にまで膨張していく過程でもあった。このような、指紋が個々人の性質を指し示し、さらには「国民」までも生み出すという言説が、同時代の優生思想やナショナリズムとどのように関連していたのかを論証する。

第三章「指紋と血の交叉——甲賀三郎「亡霊の指紋」を端緒に」では、第一、二章における指紋言説とパラレルな形で生産されていく、異なるタイプの指紋言説について問題にする。そうした言説が、指紋への〈信仰〉の成立やその帰着点と関係していることや、同時期の家族国家観イデオロギーをめぐる言説と密接に結びついていたことが位置づけられる。

第四章「「指紋」の隔たり——古畑種基「指紋」と金閨丈夫「指紋」」では、古畑種基や金閨丈夫といった法医学者や人類学者の手による探偵小説が、探偵小説構造に潜むオリエンタリズム的な眼差しなどと共犯的に作用していること、あるいは指紋への〈信仰〉の帰着点や指紋そのものに内在する論点を簡潔に指し示していることを明らかにする。

第五章「“徴”としての指紋——小酒井不木「赦罪」論」では、小酒井不木「赦罪」を例に、第三章で指摘したような、指紋をめぐる言説と家族国家観の共犯関係が示され、同時に、その交叉にある齟齬についても示してしまっていると論じる。

第六章「〈二重化〉する形象——谷崎潤一郎「青塚氏の話」論」では、谷崎潤一郎「青塚氏の話」を、指紋言説と写真や優生学に関する諸言説を縫い合わせることで、それら諸言説の潜在的な連関とそれらの間にある齟齬の双方を浮上させてしまっていたことを論証する。この小説においても、第Ⅰ部で論じたような指紋をめぐる言説が導入され、指紋への〈信仰〉の帰着点に通じるものが描かれているが、そこにさらに同時代の写真や優生学をめぐる言説が重ねられることで、諸言説間に同時代的に存在していたであろう隔たりが可視化されていると位置づける。

第七章「技術が生み出すもの——佐藤春夫「指紋」論」でも、指紋言説だけでなく同時代の諸言説が呼び込まれ、それらは一人の登場人物の主体化に寄与する形で縫い合さ

れているが、やはりそこに齟齬が生じてしまう点を佐藤春夫「指紋」を例に評価する。

第八章「痕跡としてのイメージ——〈オプトグラム〉という〈想像力〉」で取り上げたのは、指紋や写真への〈信仰〉と深く関わりを持つ〈オプトグラム〉をめぐる〈想像力〉である。〈オプトグラム〉が指紋と写真をめぐる言説の交叉から生み出された〈想像力〉であること、そしてその系譜について概観する。

第九章「カメラ化する妊婦——小酒井不木における〈オプトグラム〉の系譜」は、第八章の議論をふまえ、〈オプトグラム〉という観点から、小酒井不木の小説を再び論じる。不木の複数の小説で、〈オプトグラム〉が優生学的言説と交叉し、結び目を作っており、そこから奇妙な主題系が形成されていることが明らかにされ、さらに作品間におけるその主題の差異から見える、痕跡としてのイメージが持つてしまうある種の力について評価する。

第十章「言語化される痕跡——川端康成「花ある写真」論」では、川端康成「花ある写真」を〈オプトグラム〉的な設定や写真の物質性をめぐる語りとして読み、そこで「インデックス」性とも深く関連する、写真というメディアの物質性の言語化の不可能性と可能性が同時に問われていることを確認する。

終章では、本論文の成果と課題、本論文が位置づけられるべき問題系について記し、本論文を総括する。